2018年の小説が想像する、資本主義と物語の感染性

藤　井　　光

1．COVID-19と現代作家たち

筆者の研究や翻訳の主な対象が現代アメリカ文学であり、21世紀の小説を扱うことも多いせいか、この2年ほどは、COVID-19は文学にどのような変化をもたらしているのかという問いにしばしば出くわしてきた。当然ながら、作家の想像力が今回のパンデミックにおける人と共同体の関わりを見極める視点を獲得するのはまだ先のことになると思われる。本稿ではまずその点を確認したうえで、COVID-19前夜というべき小説において検討すべき問題を抽出したい。

2020年春、パンデミック初期に見られた典型的な反応は、ウイルスの「分け隔てなさ」に地球規模の連帯の可能性を見るというものだった。トルコと NY を拠点とする作家オルハン・パムクは、2020年の4月に寄せた論説において、ダニエル・デフォーやアレッサンドロ・マンゾーニらによる過去のパンデミック小説を引き合いに出しつつ、目下の COVID-19の状況について次のように述べている（以下、引用の訳は筆者による）。

> タイからニューヨークまで、どこでどのようにマスクを着けるべきか、店で買ってきた食べ物をどう扱うのがもっとも安全なのか、自己隔離すべきかどうかといった不安を、全人類が共有している。それによって、私たちは独りではないのだとつねに思い出すことができる。そこから、連帯の感覚が生じる。私たちはもはや自分の恐怖に恥じ入ることはない。そこに見出す謙虚さは、相互理解を後押ししてくれるのだ。（Pamuk）

世界規模で感染拡大するウイルスに対抗するような、世界規模の人類のつながりを強調したい、というある種の対抗心を、ここからは見出すことができる。こうして個人レベルと世界レベルという極小と極大の次元で議論を進めるパムクの、絶望と希望の描き方からは、その中間にある共同体レベルの視点は抜け落ちている。ジョルジョ・アガンベンがイタリアを例に指摘したような、「バイオセキュリティ」という形で民主主義から別の統治装置への変換を遂げつつある（Agamben 9）という国家権力の変容、さらには「グローバルな内戦」（Agamben 54）が、人をどう変えるのか、その後も生きねばならない人々はどう感じるのか、という問題は、中期的な視野で追いかけていくほかない。その一方、2020年春以降に発表された作家たちのエッセイや短編小説からは、間近にある喪失という事態に密着するがゆえに、人と共同性という問いを深化させるには明らかに時間不足という現状が見えてくる。

そこで本稿では、ほんの少し時を遡り、COVID-19前夜というべき2018年に発表された、感染症を主題として含む小説テクストを二つ検討し、個人の感染という現象から浮かび上がる共同体の姿を問うという切り口を考えてみたい。どちらのテクストにおいても、「人」や共同体

の輪郭を描き出そうという試みにおいて、物語の「商品価値」という視点が欠かせないものとなっている。そして、物語の読み手もそこに否応無く参加していることが明らかになる。

２．“Friday Black” と感染する者たち

まず取り上げたいのは、アフリカ系アメリカ人作家であるナナ・クワメ・アジェイ＝ブレニヤーによる短編「フライデー・ブラック」（“Friday Black”）である。舞台はニューヨーク市にあるとおぼしきショッピングモールの衣料品小売店であり、主人公である若い男性はそこで4回目の特売日であるブラック・フライデーを迎えることになる。

> 「各自配置につけ！」アンジェラが声を張り上げる。
> 飢えた人間どもが怒号を上げる。そいつらが揺さぶったり引っ張ったりすると、ゲートは悲鳴を上げてガチャガチャ音を立てる。やつらの汚い指がウジ虫みたいに格子から突き出てる。（Adjei-Brenyah 104）

この冒頭の描写から、深夜0時の開店を待つ買い物客たちがゾンビのようにみなされていることは明らかだが、物語においては客が実際にゾンビ化して登場するというひねりが加えられている。その設定は明白に資本主義の寓話だといっていい。

アジェイ＝ブレニヤーの物語のもうひとつの特徴は、ゾンビ化する人間と主人公とのあいだに言語的コミュニケーションが成立していることである。モールに殺到してくる客たちに一度噛まれると、感染することで彼らの発する音が言語として聞き取れるようになるのである。

> 初回に噛み付かれてから、俺はブラック・フライデー語を話せるようになってる。少なくとも、言われたら理解できる。スラスラとってわけじゃないが、十分なくらいにはわかる。あいつらの一部が俺のなかに入ってる。誰のためか、サイズ、モデル、型、そしてなぜ欲しいのかが聞き取れる。そいつらが口から泡を吹いてるだけだとしても。（Adjei-Brenyah 106-107）

ゾンビものの物語では、ゾンビに噛まれることで人間は感染してゾンビ化し、それによって人間とのコミュニケーションが消滅することが多いが、一方の「フライデー・ブラック」では、店員である主人公はゾンビに噛まれて感染することによって、人間でありながらゾンビの言葉を解するという中間的な立場に立つことになり、それによって、客が何を求めているのかを理解することができる。

この主人公はゾンビと人間との意思疎通を可能にするという点では翻訳者に近いのだということもできるだろう。消費の熱病に浮かされたゾンビの需要を正確に把握することと、そして製品を渡してやることがこの店員の作業であり、消費欲とレジの仲介役を務めている、という

図が浮かび上がってくる。その意味で、ここでの翻訳行為は徹底して売上に奉仕している。

ただし、それはゾンビ物語の定番である主題から逸脱するものではなく、さらに深めたものであるといえる。以下に挙げる “A Zombie Manifesto” に典型的に表明されているように、映画を中心とするゾンビもののジャンルは、資本主義への皮肉を含むものとして理解されているからである。

> 映画作家や批評家たちが注目してきたのは、ゾンビが工場労働者の機械的な動きと共振していることである。脳死状態で、イデオロギーを糧とする産業の使用人、そして、大きく開いたままの国民国家の口たる彼ら。資本主義下の個人とはしばしば、ゾンビとして特徴づけられる。(Lauro and Embry 92)

熾烈な競争が店員間では繰り広げられており、客たちの間でも商品を求めての競争で毎年多数の死者が出るのが、「フライデー・ブラック」の設定の特徴である。その意味でも、店員である主人公も客も、同じ後期資本主義の世界での奴隷的な存在であることには変わりはない。

この小説でその資本の論理をさらに強化するのが、店員と客がみずからを見つめるときの言葉である。まず、主人公は店の売上ナンバーワンであることを誇りにしており、2年前にライバルのウェンディに勝ったくだりをこう語る。

> 俺はウェンディに勝つことを目標にした。そして勝った。コテンパンにしてやった。もしかしたら、彼女が仕掛けた生物兵器ゲリラ戦のせいで、俺がシューズもデザインTシャツも帽子もデニムもカバーすることになったのに、ウェンディはポールフェイス ™ 担当のままだったからかもしれない。それとも、その年は暖冬だったからか。あるいは、俺がこの店で史上最高、空前絶後のセールスマンだからか。(Adjei-Brenyah 110-111)

彼が競争に勝った原因としてここで並べられるのは、ウェンディが毒入りパイを店員たちに食わせたせいで彼の担当する部署が増えたことと、一方のウェンディの担当である冬物ジャケットが暖冬の影響であまり売れなかったことである。つまるところ、それらは主人公自身の努力とは関係のない偶然という要素が多分に作用した結果なのだが、主人公はその結果に「自分がこの店史上最高の店員である」という原因をあとから捏造する。こうして、偶然を必然に転換することで、彼の自画像は保たれている。

この主人公が休憩時間にハンバーガーを食べに行くと、開店直後に子供といたはずの女性客がひとりで座っている姿を見かける。ゾンビの言葉を解する主人公は、家族はまだ買い物中なのかと訊ねる。

> 「なに？」俺は訊く。
> 「死んだ」女は言う。「特売。踏んで」

「ああ。そうか」

「あの子は弱かった。あの人は弱かった。わたしは強い」その女は言って、箱に描いたスマイルマークを撫でる。マークはほとんどにじまない。「弱かった」彼女はもう一度言う。「了解」俺は言う。（Adjei-Brenyah 112）

大量の客がセール品に殺到する混沌のなかにあって、娘と夫が死んだことは「弱かった」せいであり、自分が生き残った理由は「強い」からだとその女性客は述べる。そこにも、生き残ったという事実にありえた偶然という要素を、みずからの能力による必然だと転換することで現実と折り合いをつけようとする姿勢が見える。主人公がそのやり取りの最後に発する「了解」（“Got it”）というセリフは、単に状況を理解したという以上に、この二人の間で根本的な共通点があることを示してもいるだろう。ある意味で、“Black Friday” の物語が “Friday Black” という逆転したタイトルになっているのは、このような論理の転倒を指し示してもいるかもしれない。

この両者がバーガーセットを分け合っているという設定からも、ゾンビも人類も同じく、市場と同一視された社会における競争で自己の価値を高めるという新自由主義経済のモデルを共有しており、各個人がみずからの置かれたシステムを無自覚に強化していくという形で「感染」しているのだ、という小説の視点を見て取ることができるだろう。それはある意味、ゾンビ物語の定番の使い方だといえる。

そうした競争モデルによって抑圧されることになるのが、このところ文学批評において注目され始めた「ケア」という要素である。その代表的な論者である小川公代は「暴力を回避することで相手を、あるいは自分を傷つけない選択をすることがケアの倫理の根幹にある。ケアの倫理では、夫婦や親子、あるいは友人関係といった人間同士の関係性が核をなすのも、その関係性を維持していくなかで、『没入』や『共感』が期待されるからである」（130）と述べている。それとは対極にある世界を描く「フライデー・ブラック」においては、ケアの倫理は資本の論理に圧倒されている。

去年、フライデー・ブラックは129人の命を奪った。「ブラック・フライデーは特殊なケースです。当モールは今でもお客様への思いやりと人同士のつながりの場所です」と、ショッピングモール全体向けの通知で責任者は言っていた。まるで、人に対する思いやりのスイッチを入れたり切ったりできるみたいに。（Adjei-Brenyah 108）

感染が強化する競争と格差、そのなかで周縁に追いやられる「ケア」が、この物語では二極構造をなしているといえる。そして、短編のクライマックスでは、商品欲しさに仲間の店員を追い詰める客に、主人公が母親にプレゼントするべく店の奥に取ってあったコートを渡すという、暴力を回避するための「ケア」が発揮される。その商品を受け取ったゾンビ客は、レジを管理する店長と通常の挨拶を交わしており、そこでは「食うか食われるか」とは違う光景が出

現している。

> 「よい一日を」とリチャードは言って、レジをチリンと鳴らす。女の子は低く唸り、それから「あなたも」と言う。俺は休憩から戻ってきた記録をパソコンに打ち込む。アンジェラが俺の肩に手を置いてくる。「ありがと」と言う。
> 「おう」俺は言って、自分の持ち場に戻る。(Adjei-Brenyah 114)

ここでの主人公は、コートの購入が終わったあとに休憩時間終了を入力しており、店でもっとも高価な商品の売上は彼の業績にはカウントされない。そのことも、この短編最後の主人公の行動が利他的であることを際立たせている。すなわち、いくら死者が出てもお構いなしに開催されるセール日のモールという空間を現代社会の寓話として提示するこの「フライデー・ブラック」においては、資本主義の論理が感染拡大して殺伐とした世界が広がっているものの、それに対抗しうる要素としての「ケア」が物語の最後に示されている、とまとめられる。

しかし同時に考えねばならないのは、主人公が資本の論理の支配から抜け出る可能性がラストで提示されることが、主人公の成長物語という読みを誘う、意図的な仕掛けではないかという点である。このラストは、読み手にとって共感可能な物語としてこの短編を最後に定義するわけだが、そこにも「感染」というモチーフを見出すことができるからである。

このようにして考えるとき、「感染」をもう少し広い文脈でとらえることも可能になってくると思われる。それは、物語において表現される感情が、読み手に「感染」するという、共感(empathy)の問題である。その分野を牽引する論者のひとりであるSuzanne Keenは、物語における「共感」の分析において次のように述べている。

> そうして、たとえば、物語に対するわれわれの反応のなかに感情的感染(emotional contagion)が働くようになる。われわれは物語を共有する生き物だからだ。・・・散文や映像による物語は、われわれの感情を操作し、持って生まれた「他者とともに感じる」という能力に訴えかけてくることで悪名高い。(Keen 209)

もちろんここでの「感情的感染」とは比喩であるが、小説におけるこの要素を積極的に活用しているのが「フライデー・ブラック」という短編であるという視点を与えてくれる。店員と客、そして店員間での「ケア」が登場し、それがきっかけとなって何らかの「救い」を読み取れるようにすることで、読み手にとってこの短編は、主人公の語りにおける救いのなさに引きずり込まれた先に一筋の光が見えるように構成される。それをもって作品の「価値」とする視点は、この短編テクストに「外」から与えられるのではなく、物語のなかにあらかじめ組み込まれているのである。

言ってみれば、この短編は物語の構成と商品価値の接点を作ることで、テクスト外に向けた感染可能性を可視化している。単純な「ケア」のメッセージが商品価値を保証するものである

なら、モールという名のシステムからの出口はそこにはない、というのが「フライデー・ブラック」の究極の問いなのだと言えるだろう。

3．*Severance* と反復する者たち

「感染」という主題を引き継いで、もうひとつのテクストであるリン・マーの長編小説『断絶』（*Severance*）を取り上げたい。2011年に深圳で発生した「シェン熱」（Shen Fever）という感染症のパンデミックにより、人類がほぼ死滅したアメリカ合衆国を舞台とし、中国からの移民であるキャンディス・チェンが生き延びようとする物語である。ここでも、本あるいは物語の商品価値と感染という主題は分かちがたく結びついている。

Stephanie Boluk と Wylie Lenz による、デフォーの『ペストの記憶』と21世紀のゾンビ映画をつなぐ論考では、デフォーの時代から疫病の感染拡大が資本主義と密接に結びついていたことが指摘される。

> 感染とはテクストの周囲に潜んでいるのではない。言ってみれば、感染は舞台の中央を乗っ取るのである。同様にして、資本主義の拡大について考えるための構築物としての疫病の有用性も明らかになる。資本の循環は疫病の手先となり、市場や交易路に広がっていくのである。（Boluk and Lenz 130-131）

こうした状況において、本という物体もまた、思想のみならず感染を各家庭に持ち込む危険があるものとみなされていたという（Boluk and Lenz 133）。

こうした資本主義と感染症の結びつきを、マーが受け継いで「本」という物体に凝縮していることは明らかである。『断絶』において、主人公のキャンディスは出版プロダクション会社で勤務しており、香港支社を拠点としてアジア方面に仕事をアウトソースする調整を行うのが主な業務内容である。マーの小説においては、中国南部で発生したシェン熱を世界各地に拡大させるのは、アウトソースされた製品がそこから諸地域に発送されていくという物流であるが、そのプロセスを凝縮して示すのは、キャンディスが担当する聖書の製造工程なのである。紙はスイス、表紙の合皮はイタリアから納入させ、深圳にある工場で製本して香港から出荷し、全米各所に届けられるというこの聖書の製造と納品の過程と、そのネットワークに乗って広がる感染症という発想は、グローバル化した労働に対する皮肉としては非常に生真面目な設定であると言っていい。

なおかつ、聖書に関する記述で特徴的なのは、中身の文章は一切変わらないままパッケージを変えて毎年発売され続けるという点である。

> あらゆる本のなかで、聖書とは製品パッケージのもっとも純粋な形だ。同じ内容が、無限にある新しい組み合わせで百万回も包装し直される。毎シーズン、私は顧客の出版社を

せっせと回り、合成皮革の最新のトレンドや、金属箔の浮き彫り細工や彩飾の最新技術について解説していた。あれだけの種類の聖書の製本を監督してきたとなると、どの聖書を見ても、頭のなかで多種多様な部位に分解するようになる。紙の仕入れ、リボンマーカー、見返しの紙、寒冷紗、そして表紙。聖書は年間ベストセラーの一位なのだ。しかも毎年。(Ma 23)

このように、「本」を通じて資本主義の現在に目を向けようとする視点は、必然的に、『断絶』というこの小説自体の商品価値を検討することを要請してくる。そこで問題になるのは、「反復」というこの小説の根本的な構造である。それが一番前面に現れているのは、熱病に感染した者は、過去のある行為を延々と反復することしかできなくなるという設定である。そこに、ニューヨークのインフラが崩壊寸前にまで陥っても、普段どおり出社を続けるキャンディスの行動における「反復」が重なっていることで、熱病者とそれ以外の区別が曖昧になる主題上の仕掛けは明白である。

それを念頭に置いて、小説の構成に目を転じるなら、『断絶』という小説それ自体がジャンルを再利用していることが大きな特徴である。もっとも目を引くのは、ジャンルとしての世界終末ものの丁寧な反復である。Theodore Martin により、そのジャンルの特徴は的確にまとめられている。「たいていの場合、世界の終わりは物語の始まりでしかなく、物語の終わりにはしばしば、さらに新しい始まり、新たな社会的生活が花開くとまではいかなくともその希望が垣間見える」(161)。このジャンルの特徴は、そのままリン・マーの小説に当てはまる。物語の最初の単語が “The End” であり、最終的には妊娠中のキャンディスが出産に備えるというエンディングは、まさにこのパターンをきれいになぞっている。

世界の終末という物語にとどまらず、『断絶』という小説は既存の物語ジャンルの反復を何重にも利用している。まず、ニューヨークから脱出したキャンディスが、生き残りの八人に合流してシカゴ近郊を目指すという旅路からは、東から西に向けて旅立つことで人生の再出発を図るというロード・ナラティブの定型をなぞっている。そして、道中で仲間が突然熱病を発症することで、「誰がゾンビ化するかわからない」という緊迫感が生まれること、一行がたどり着くのがショッピングモールであることは、ゾンビの物語において典型的な要素である。そして、キャンディスは生き残りグループのリーダーから裏切り者と名指され、ショッピングモールでは監禁されて数ヵ月を過ごすが、すでに亡くなっている母親の声と対話して脱出の可能性を見出す。こうして移民の母娘が対立から和解に向かうというプロットの進行は、1980年代のエイミ・タンに代表されるような移民家族の母娘の物語の再提示なのだと言ってもいい。

つまり、『断絶』という小説は多くのポピュラーな物語ジャンルを横断しながら、各ジャンルのクリシェを反復してみせる。そのうえで、エンディングには自力でショッピングモールから脱出して娘を出産して育てる場所に向かうキャンディスの姿を用意しているわけであり、その外枠だけを見るならば、母の教えを胸に現在の苦境から脱出し、未来に向かう主人公という、非常に手堅いプロット選択がなされている。先ほどの「フライデー・ブラック」の議論になら

うなら、読み手に「感情的感染」を生み出しやすい型を選んでいるとも言える。物語としてのこの小説は、過去の物語を取り込んで「価値」を獲得するという意味で、感染力の強い手法を選んでいるかに見える。

ただし、複数の物語ジャンルが一度に取り込まれ、物語における過去と現在において同時進行することによって、プロット上では物語進行が妨げられるという遅延効果がもたらされている。それぞれのジャンルにおいて期待される決定的瞬間、ゾンビものではショッピングモールからの脱出をかけた最後の戦い、ロード・ナラティヴでは目的への到達、移民文学では親と子の和解の瞬間、といったものが先延ばしにされていく。

加えて、小説はさまざまな場面において完全な過去の反復ではなく「ずれ」を持ち込むという手法を用いている。たとえば、小説における感染症は真菌の胞子による空気感染であり、ゾンビ物語における「噛む・噛まれる」という感染の決定的瞬間を特定できない。感染者は気がつけば発症しているのであり、みずからの命を守るためのドラマチックな展開は生じない。したがって、物語の最終盤で、監禁されたキャンディスが、ある種教祖のように振る舞うグループのリーダーであるボブを襲撃して車の鍵を奪うという場面でも、その「あっけなさ」はあからさまである。

> さっさとキーを手に入れればいいのだが、私はボブの脇腹と、お腹と、股と、顔と、体の柔らかいところをすべて蹴りつける。蹴りの嵐は、素早く、激しくエスカレートし、ボブには反応するチャンスもない。反応することができるのかは怪しい。腕を上げて自分を守ろうとすらしないからだ。それで私はさらに勢いづく。ボブの顔に唾を吐くと、目にかかるが、彼はまばたきすらしない。そうやって蹴っているときの、ビシャ、バキ、という音は、現実とは思えないテレビゲームの音だ。(Ma 282)

キャンディスは相手がすでに熱病に感染していることを知っており、その意味では、もはやドラマチックな決闘は成立しない。そのかわりにこの場面のハイライトとなるのは、ストレスを発散するかのように無抵抗の相手を蹴り続けるキャンディスの一方的な暴力性であり、それを楽しんでいる描写すら付け加わることで、彼女の脱出には「フライデー・ブラック」の対極にあるような後味の悪さがつきまとうことになる。

登場人物たちへの読み手の共感が発生するかしないか、という二進法的な議論を精緻化する試みにおいて、Rita Felski は、登場人物に対する「同一化」(identification) を構成する4つの要素として、“alignment” と “allegiance” と “recognition” と “empathy” を挙げている (93)。一人称の語りが提供する視点による “alignment” によって、読み手はキャンディスの視点から世界を眺めるよう誘導され、来る日も来る日も労働するキャンディスの姿に読者はみずからの姿を認識するという “recognition” も発生するだろう。一方で、この場面ではキャンディスを応援するという “allegiance” は発生しづらいように設定されている。それによって、他者への共感と連帯という “empathy” はむしろ遠ざけられるのである。Felski の図式を援用するなら、

読者はみずからの姿をキャンディスに認めつつ、自分自身を新たな目で見つめ、そこにわずかな不快感を発見するのである。

それをさらに裏打ちするのが、シェン熱が流行した設定の2011年にNYで発生した“Occupy Wall Street”運動の描かれ方である。メディアの寵児となったその運動は、まさに『断絶』が描き出す現代の資本主義への異議申し立てであり、マーの小説に登場するのは当然の流れであるといえる。しかし、小説におけるこの運動の描写はあからさまに冷淡であり、少しの間抗議活動が盛り上がったあと、マスクもせずに密集してスローガンを叫ぶ人々の間で感染者が出たためにすぐに解散されるという展開にされている。そもそも、その運動につながる金融危機については、小説内ではまったく言及がない。このあからさまな省略は、資本主義がもたらす「危機」とそれに対する抗議の盛り上がりという劇的な要素を排除するという語りの戦略の表れであると考えられる。それを別の角度から見るならば、個人が状況を大きく打開できるのだという物語展開が徹底して避けられ、感情移入にささやかな断絶がもたらされていると言ってもいい。

小説内でもっとも読み手の共感に近づく要素といえば、ショッピングモールに監禁されたキャンディスが、頭のなかで母親と会話をして脱出の戦略を見出し、そして実際に脱出して娘を産み育てるべく単独で旅立つというラストの展開であると思われる。そこにおいても、物語は過去と現在と未来を単純につなぐ直線を用意するわけではない。まず、母親との会話においては、母親が生前とは違って完璧な英語を話していることへの違和感をキャンディスは口にしており（Ma 269)、ここでの対話が生前の記憶ではなくキャンディスの創作でしかないことを示唆している。それを裏付けるように、生前の母親はキャンディスのスキンケアにあたっては一貫してクリニークの製品を使って指南していたが、ショッピングモールでキャンディスが監禁されるのは別ブランド、ロクシタンの店舗なのである。こうした描写では、母親と娘の和解、すなわち過去と現在が架橋される、という要素が虚構でしかないことが露呈している。

まとめるならば、『断絶』という小説は、ゾンビと感染症という組み合わせにある資本主義との関わりを真面目に受け継ぎながら、文学の商品価値を問うテクストであるといえる。ジャンルの定型への目配せに満ちているこのテクストは、読み手の視線を計算に入れ、物語そのものにどのような商品価値が与えられるのかを想定しつつ、型通りの物語展開によって価値が生まれるタイミングをほんのわずかにずらしていくという作業を行う。それによって、物語と読み手の間の「感染」を抑制し、そこになんらかの「自由」の余地を夢見ようとしているとまとめられるかもしれない。

４．物語と読者たち

ここで検討した二つの小説の、外形における共通点は容易に見て取れる。いずれも、ゾンビ物語の変種あるいはパロディを軸として、資本主義に生きる主人公が職場での仕事の反復に埋没しているという設定から、個人がそこから「外」に出る可能性はあるのかと問いかける物語である。「病」とは競争や個人の価値といった新自由主義の価値観であり、それこそが世界的

に感染拡大しているのではないかという問いも、そこからは見て取れる。

加えて、感染する病とは必然的に共同体の問題を呼び込むことになる。その視点から考えるとき、どちらの小説テクストも、読み手をどう物語に関わらせるのかという戦略を組み込んだ上で成立している点は注目に値する。そこからは、小説のもつ感染力という性質を見極めるという作業が要求されているのである。Rachel Greenwald Smith が、「新自由主義は個人を起業家として想定する。情動の仮説は、読書という行為を感情的に投資してリターンを得る機会として想定する」（Smith, *Affect* 2）と定義しているように、物語における資本主義批判それ自体はおなじみのパターンでしかなく、その物語が自由であること、さらには物語に共鳴する者が自由であることを保証することはない。それを承知で、「フライデー・ブラック」は物語の商品価値を高める構成を露悪的に選び、『断絶』はジャンルの定型を駆使しつつ、読者が共感を投資してカタルシスというリターンを得ようとするなかに微妙なずれと居心地の悪さを潜ませることで何らかの批評性を維持しようとする。この二つのテクストから、前向きな結論をいささか強引に引き出すとすれば、そうしたテクストの戦略は、新たな共同性を思い描き、差異としての未来（Nilges 369）を想像するための助走なのだといえるかもしれない。

* 本稿は茶話会トークとは別に、新たに執筆したものである。

参考文献

Adjei-Brenyah, Nana Kwame. *Friday Black*. Riverrun, 2018.

Agamben, Giorgio. *Where Are We Now? The Epidemic as Politics.* 2021. Trans. Valeria Dani. Rowman & Littlefield, 2021.

Boluk, Stephanie and Wylie Lenz. “Infection, Media, and Capitalism: From Early Modern Plagues to Postmodern Zombies.” *Journal for Early Modern Cultural Studies,* vol.10, no. 2, 2010, pp.126-147.

Cross, Gary. *Consumed Nostalgia: Memory in the Age of Fast Capitalism.* Columbia UP, 2015.

Felski, Rita. “Identifying with Characters.” *Character: Three Inquiries in Literary Studies.* The U of Chicago P, 2019, pp. 77-126.

Keen, Suzanne. “A Theory of Narrative Empathy.” *Narrative* vol.14, no.3. 2006, pp.207-236.

Lauro, Sarah Juliet and Karen Embry. “A Zombie Manifesto: The Nonhuman Condition in the Era of Advanced Capitalism.” boundary 2, vol.35, no.1, 2008, pp.85-108.

Ma, Ling. *Severance.* FSG, 2018.

Martin, Theodore. *Contemporary Drift: Genre, Historicism, and the Problem of the Present.* Columbia UP, 2017.

Nilges, Mathias. “Neoliberalism and the Time of the Novel.” *Textual Practice,* vol.29, no. 2, 2015, pp. 357-377.

Orange, Tommy. “Friday Black Paints a Dark Portrait of Race in America.” *The New York Times,* Oct. 23, 2018. https://www.nytimes.com/2018/10/23/books/review/-nana-kwame-adjei-brenyah-friday-black.html. Accessed 24 Oct. 2021.

Smith, Rachel Greenwald. *Affect and American Literature in the Age of Neoliberalism.* Cambridge UP, 2015.

The New York Times, ed. The Decameron Project. Scribner, 2020.

小川公代『ケアの倫理とエンパワメント』講談社、2021 年。